

# 日本学校教育相談学会

THE JAPANESE ASSOCIATION OF SCHOOL COUNSELING AND GUIDANCE

栃木県支部会報 2013.09.30

NO.19

- 平成 25 年度日本学校教育相談学会栃木県支部総会
- カウンセリング特別講座  
「学級経営に生かすカウンセリング」  
有村久春先生（帝京大学こども学部教授）
- 日本学校教育相談学会 第 25 回 総会・研究大会（岐阜大会）報告
- ガイダンスカウンセラー会に関する報告
- 栃木県支部からのお知らせ

## ○ 平成 25 年度日本学校教育相談学会栃木県支部総会

平成 25 年 6 月 2 日（土）に教育会館 5 階小ホールにおいて平成 25 年度日本学校教育相談学会栃木県支部の総会ならびに帝京大学こども学部教授の有村久春先生をお迎えして、カウンセリング特別講座が行われました。

### 総会議事

- (1) 平成 24 年度事業報告
- (2) 平成 24 年度決算報告
- (3) 「会計監査」報告
- (4) 平成 25 年度事業計画案審議
- (5) 平成 25 年度予算案審議
- (6) その他



### 栃木県支部役員

支部理事長	丸山 隆	
事務局 長	谷津 嘉子	
理事	池田 清恵	伊澤 裕
	小川 正人	川俣 幸雄
	佐藤 幹雄	柴 一弥
	原田 浩司	藤浪 直紀
	毎澤 典子	築瀬のり子
会計監査	笠原 光雄	齋藤 誠一郎



※今年度は支部役員の任期に伴い再選の年でした。理事会での協議の結果、今回は支部役員全員の再任となりました。理事会では、「新しい役員が会員の皆様の中から選出される様に栃木県支部の活動を活発にしていきたい」と方針が話し合われました。



## ○ カウンセリング特別講座

### 『学級経営に生かすカウンセリング』

講師 有村久春先生 (帝京大学こども学部教授)

平成25年6月2日(土)に教育会館5階小ホールにおいて帝京大学こども学部教授の有村久春先生をお招きし、『学級経営に生かすカウンセリング』とい演題でご講演をいただきました。会場は満席状態ではありましたが、活気溢れる有意義な記念講演が行われました。

先生は「教師は学級経営とカウンセリングの両者を行き来しながらカウンセリング感覚を磨き学級経営に生かしていく事が良い」と話され学校における両者の関係性やバランスについて話されました。まずはカウンセリング感覚を磨くため二人一組で『不一致の解決』を体験する演習を行いました。「感覚を磨くにはクライアントの不一致と不一致が一致に向かう体験を知ることがカウンセリング感覚を磨くには必要である」、「フィードバックは後から繰り返すことと共感することでクライアントは自己一致に向かう」と話されました。



クライアントの不一致が一致に向かうのに関わるには①受容体験、②感情の明確化、③行動化の三つの段階を踏み、受容体験の段階では傾聴と単純受容と繰り返しを行いクライアントに「わかってもらえる」を感じてもらうことが大切であり、この段階で感情の明確化を行うべきではない。感情の明確化は「クライアントの気持ちの整理」であり相手の価値観のもと共感することでクライアントの感情が明確に整理されていく。行動化とはクライアントが「自分の考えで動ける様になること」であり、我々の関わりは、それを一緒に考えていくことであると話された。また、人間関係作りの三つの秘策は『お互いの存在を大切にする』『言葉で無く近くに居ること』『相手を心待ちにすること』であり、お互いの存在を尊重したり、相手をゆっくりと見守っていたり、お互いのルールを理解することで良い人間関係が作れると話されました。

学校における教育相談(カウンセリング)のあり方は、現実的に機能する組織として存在しなければいけない。「役割」や「組織」を作ることによって『クライアントである生徒達が安心して相談できる環境を整えることも大切な仕事である』と熱く語られました。

今回の講演では、公演時間内に演習をうまく取り入れ、受講者に学校において教育相談やカウンセリングを行う者が、つい日々の忙しさから忘れがちになるカウンセリング感覚を磨くことの大切さを、体験をもって思い出させてくれた講演でした。受講者の中には、『学級経営と



教育相談(カウンセリング)の両者が並んで機能する環境を学校内に作り上げることも教師の重要な仕事であることを再認識させられた』と感想が聞こえてくる有意義な講演でした。

(藤浪 直紀記)

## ○ 学校教育相談学会 第25回 総会・研究大会（岐阜大会）報告

大会テーマ「一人一人を 認め 育て つなぐ 学校教育相談」



西日本から東日本にかけて各地で、最高気温が更新される猛暑続きの8月。その暑さの日本最高記録を記録した岐阜県で9日から3日間、平成25年度第25回総会、並びに研究大会が瑞穂市朝日大学にて開催されました。

栃木県からは2名の事例発表者と10名余りの会員の参加がありました。

9日の代表者会議では、支部活動の活性化について、各支部から活動状況が発表され、その後、ブロックごとの話し合いが持たれました。北関東・山梨ブロック4県での情報交換では、今年度、埼玉ブロックによる合同研修会が開催されること、来年度の開催県である群馬県支部から、近県支部の参加と協力の要請がありました。また、平成25・26年度、役員等候補者の信任投票結果と、事務局として長年ご尽力いただいた佐藤敏さんの退任が報告されました。

懇親会は学内の食堂で開催され、元フレンチレストランのシェフが腕をふるったビュッフェスタイルの様々なご馳走と地酒が準備されていました。そこで、ご馳走に舌鼓を打ち、酒を酌み交わし、近県の代表者の皆様方と親交を深めることが出来ました。中でもデザートソフトクリームはみなさんの人気を集めていました。

それでは岐阜大会の様子を参加した会員の皆様に報告して頂きましたのでご覧ください。

また、来年度は8月8、9、10日、やはり暑いことでは岐阜に勝るとも劣らない群馬県前橋市で、第26回総会・並びに研究大会の開催が総会で決定されました。

テーマは「**かかわり つながり 育てる 未来志向の学校教育相談の創造**」です。いじめ、自殺、不登校、体罰、東日本大震災、学力向上人間関係づくり等、様々な事柄が学校教育相談の課題となっている現状を考え、その予防や解決に向けて学会員が鋭意努力してきた結果を踏まえ、その実践智や経験値を群馬大会を通して発信したいという熱い思が次回開催の予告としてアピールされました。来年度は関東での開催ですので、栃木支部からもたくさんの会員が参加することを期待しています。

(谷津 嘉子記)



## \*岐阜大会記念講演報告

記念講演 8月10日(土) 11:00~12:30 <6201 教室>

演題「人と人とのつながりや思いやりを育てる学校教育相談」

講師 兵庫教育大学大学院教授 富永 良喜

富永先生の講演は情熱的であった。まずは、道徳教育だけで今の子どもたちの心を支えられるのかという問題提起に始まり、続いて、日頃の実践活動「ストレス対処法」「話の聴き方」「アサーショントレーニング」「リラクゼーション」「親子ストレス」「DVDこころのサポート映像集」「小島汀さんからのメッセージ」などが取り上げられた。そのうち私の印象に残った2つを紹介しよう。

最初に、「こころのサポート映像集」では、卓球の福原愛さんや柔道のロンドンオリンピックゴールドメダリスト松本薫さんを例として挙げられた。映像を通して、子どもたちは、あんな有名な人たちも、ストレスにさらされ一生懸命対処していることを知ることができる。また、その映像を見ることで、自分は弱音を吐いてもいいんだと思うことができ、更に、ストレスにどう対処するかモデルになっていることをお話しになった。第2に、大震災のこころのサポートについては、阪神淡路大震災に遭った、関西大学、小島汀さんの話が印象に残った。彼女は星野監督（彼は生まれる前に父を亡くしている）との出会いによって、同じ境遇なのに、なんて堂々としてるんだと思い、前を向こうと決心した。それが、小6の学校での阪神淡路大震災の追悼の会で語ることにつながる。そしてまた、ひとつ、大学生の彼女に、友達がぼろっと弱音を吐いたことで、自分の震災被災者としての思いを東北の人たちに話す決心がついたのだ。具体的には、「小2~3年生まで、トイレに1人で行けなかった。1人で寝られない。狭い部屋が怖い」ことなど、人には話したくない、こころに閉じ込めておいたことを話せたのだ。それが、東日本大震災に遭った子どもたちにどんな勇気を与えたことか。

先生の講演から感じられるものは、今すぐに、教科としてあるいはプログラムとして、子どもたちの「怒り」や「悲しみ」に向かい合える「こころの健康教育」の学校教育への導入に対する切々たる思いでした。

## \*岐阜大会に参加して 感想

雀宮南小 塚原 寿美子氏

平成25年8月9日(金)、岐阜県の朝日大学において第14回夏季ワークショップが開催されました。今年度から特別支援学級の担任になり、特別支援教育のセンター的役割を果たしていく必要性を常々感じていたこともあり、大阪教育大学教授である水野治久先生をお招きした『チームで取り組む学校教育相談』の講座を受講しました。

前半は、チーム援助とは何か、今なぜチーム援助なのか、チーム援助の教師に対する効果などについての講義の後、先生が経験なさったケースについてのお話へと進みました。その中で、教師の被援助志向性の低さがチーム援助を難しくしている理由の一つであるという話題が、心当たりもあったため印象に残りました。個人の努力では解決できない問題も多い今、開かれた職場作りの大切さを再確認しました。

後半は、チーム援助の疑似体験を中心に進められました。役割を決めた上での話し合いの場面では、持っている情報や援助案をどのように出していくかが難しく感じましたが、具体的な行動の形で示せば相手に届くということをもっと感じることができました。話し合いを通して、見方や立場の違いを乗り越えて、各々ができることを考えていくことの重要性を痛感しました。

今回の講座で学んだことを、現場での実践に繋げていけるよう努めていきたいと思えます。

## \*第14回 夏季ワークショップに参加して

今年の最高気温が次々と塗り替えられていた8月9日、その日最高気温を出した岐阜県多治見市隣の瑞穂市の朝日大学でワークショップが行われました。

日頃、「児童の問題行動への対応は学級担任だけでなく、学校の職員が様々な角度から支援を行うことがより良い効果がある」と考え、養護教諭の立場からの側面的なかかわりをし、SCMとして校内体制づくりの必要性を強く感じていたので、大阪教育大学教授の水野治久先生が講話される「チームで支える学校教育相談」を選びました。

「チーム援助」とは、学習面、心理面、社会面、進路面、健康面に援助ニーズが大きい児童のために、担任、学年主任、生徒指導主任、養護教諭、スクールカウンセラー、保護者などがチームを組み、援助案を考え、援助を提供していくことです。実際には、チーム援助を導入していくときに、コンサルテーションやコーディネーションが必要となりますので、スクールカウンセラーや教師を中心にそれぞれの立場での支援（援助）を決めていきます。特に、学校の雰囲気、協動的な雰囲気が「チーム援助」の効果を上げるうえで特に大きな要因となることを学びました。

後半では、「創作事例」を学級担任、学年主任、養護教諭、生徒指導の役割になり演習しました。実際の立場とは違う役、ということで、私は「学級担任」を演じました。演習とはいえ、生徒の問題を次々に言われることは、学級担任の役をしている私には圧迫感がありました。学級担任として、何とかしなくてはとは思っても、



話し合っている方々に「支援を求める」という思いはありませんでした。そんな中、問題解決へ向けた提案が他の先生からあがり、生徒指導の先生が「みんなでそれぞれの立場から支援していきましょう」という言葉に、今まであった重みがフッと軽くなったような気がしました。

普段、養護教諭として問題を持つ子どものために、何かできないか、学級担任への支援はなにかと思っていた私にとって、この役割演技は学級担任の思いを理解する貴重な経験でした。

水野氏が言われたように、学級担任が児童生徒の問題で心重くならぬよう、職場の雰囲気、協動的な雰囲気に留意し、支援の方向を探っていきたいと思います。

(池田 清恵記)

## \* シンポジウム報告 テーマ「だれもが行きたくなる学校」

自主シンポジウム1は、「だれもが行きたくなる学校」を創る～総社方式による学校改革プロジェクト～と題して、8月10日(土)の午後に次のように進められました。

まず広島大学教授の栗原慎二先生から話題提供がなされました。栗原先生は、「不登校を減らす」ためには、すべての子供が「学校への適応感を高める」こと(適応感の底上げ)が必要であると指摘され、子供たちが楽しく生活できるために有効な様々な視点からのアプローチ(マルチレベルアプローチ)の理論を示してくださいました。

次に岡山県総社市立総社西中学校長の藤井和郎先生と同中学校教諭の高田清美先生から、具体的な実践報告がなされました。同中学校では、上級生による生活ガイダンスなどのピアサポート、全ての教科で行われる1コマ5分(1日30分)の協同学習による支え合い、地域の人へのあいさつの励行などの品格教育の実践を続ける中で、昨年度は2009年と比べ長期欠席者が34%減少したそうです。

最後に兵庫教育大学教授の新井肇先生から、開発的生徒指導が一層必要になること、生徒指導と学習指導の一体化の有効性、組織として取り組むことの大切さが確認されました。

「不登校を減らす」ためには「適応感を高める」という視点や、そのためにまず「できることをやってみる」という意識の持ち方など学ぶことの多い研修でした。

(原沢 大生未氏)

## \*ワークショップ報告 Bコース

### 「不登校問題から見える子どもの世界と実践的課題」

講師 立命館大学文学部応用人間科学研究科教授

春日井 敏之（臨床教育学）

春日井先生は、不登校問題に取り組む上で大切なこととしてケース・カンファレンスの重要性を次のように指摘している。

「特に、子ども理解と取組み方針を深めるケース・カンファレンスを重視して、支援の道筋の共有化を図っていくことは、現代的な意味を増している。個と環境調整への取組みは、不登校状態も含めて、そのなかで子どもが育つための支援を工夫していくことであり、そうした取組みが結果として減少にもつながっていくと考えている。」

また、教師は、「学校現場に入ったとたんに、ゼネラリスト（総合職）としての力量が強く求められてくる。」と述べ、さらに、「総合職としての力量は、個人から集団へと質的・機能的な変化が求められている。・・・一つには、学校内で同僚等とつながっていく『内に開かれた支援ネットワーク』の形成、二つには、学校外の専門機関とつながり協働を図っていく『外に開かれた支援ネットワーク』の形成が重要である。・・・『内に開かれた支援ネットワーク』の展開として、ケース・カンファレンスがあげられる。」と述べている。さらに、ケース・カンファレンスを行う際の基本的な視点として、大切にしてきた5点を挙げている。（要約して載せました）

- 1、「課題解決を志向する」…半歩前進のために具体的に何ができるかを検討する。
- 2、「困っている人を救う」…困っているのは誰か。
- 3、「キーパーソンを探す」…誰に相談し、頼ったらいいのかを検討する。
- 4、「援助資源（リソース）を生かす」…支援に必要な人々に依拠し、役割分担を図る。
- 5、「ミニ・チーム会議をタイムリーに開く」…学年会議や担任・養護教諭・生徒指導担当などによる短時間の関係者打ち合わせなど、タイムリーに柔軟な形で開いていく。

最後に、教師が児童生徒へのかかわる際の大切なこととして、次の3点を挙げている。第一に「問う」というかかわり方…「どうしたんや」と気になる子どもに問いかける。「子どもの言動の意味を自らに問う」「周辺の同僚などと子どもの言動の意味を問い合う」第二に、「聴く」というかかわり方で最も大切なことは、これまで抑圧や爆発をさせてきた「負の感情を聴き取る」ということである。

第三に、「語る」というかかわり方で最も大切なことは、教員が「自分の失敗を語る」ということである。…どんな失敗をし、どんな葛藤を抱えたのか、誰に助けてもらったのか、どうしのいで現在にいたったのか、などについてリアルに語ることである。これが、生き方を考え合う進路指導、キャリア教育になる。

以上のことは、教師や親に求められているコミュニケーション能力でもある。

・・・春日井先生の述べたことはどれも目新しいことではない。しかし、教師として原点を見つめ直させてくれるものであることは間違いないと感じた。その他にも、子どもに対する深い愛情に裏打ちされた母親の言葉や、春日井先生の眼差しが捉えた子どもたちの生きる力があふれた言葉を紹介できないのは残念である。

（佐藤 幹雄記）



## \* 岐阜大会に参加して

岐阜（会場は瑞穂市朝日大学）は聞きしに勝る暑さであった。

昨年同様、私は栃木支部事務局の Y 女史 と行動を共にした。彼女は栃木支部の活動をより活性化させ、前進させることにいつも余念がない。初日の全国支部活動推進協議会、支部代表者会議、夜の代表者懇親会を丸山支部長とともに旺盛にこなした。

二日目、三日目の彼女は栃木支部所属の方々が発表する分科会に赴き、記録を執り、カメラで姿を追いかけていた。松本直美さん（下野市立吉田西小学校）による「心理アセスメントを活用した学級集団の事例研究」、岡本幸二さん（栃木工業高校）の「高3 自閉症生徒への対応事例」の二つの口頭発表があった。お二人ともお人柄がそのまま表れ、真摯な姿勢と木訥とした語り口には好感が持てた。大変お疲れ様でした。

Y 女史との行動は岐阜の夜にまで及んだ。あの信長が市内にそびえ立つ金華山という山頂に築城した「岐阜城」で夜景を満喫しようということになった。ケーブルカーを利用しての山登りであった。夜9時を過ぎても大勢の人々が涼を求めにやってくる。標高300メートル近い天守閣から見下ろすと、長良川にふち取られた無限の街灯りは評判通りの見事なものだった。天下をとった信長が感じたであろう高揚感を私たちも味わえたのは全国大会ゆえのよい経験だった。

ところで、二日目の8月10日に行われた、富永良喜氏（兵庫教育大学大学院教授）による「人と人とのつながりや思いやりを育てる学校教育相談」と題した記念講演で、彼はしきりに道徳教材「心のノート」（2002年文科省配布）に「心の健康やストレスマネジメント」に関する記述、教材を乗せるべきだと主張していた。いじめ防止対策法案が先だって成立したこの時期にこそ「怒りやストレスとのつきあい方を学ぶ心の健康教育」を体系的に導入せよという趣旨であった。西欧諸国では、「社会性と感情の学習プログラム」を、中国でも「心理健康教育」を創設していると紹介した。次の学習指導要領改訂を待っている余裕はない、緊急的でもよから「怒りのコントロール」などの体験活動を道徳の時間に行えるようにしてはという提言があった。

折しもこの提言がなんと9月上旬の朝日新聞全国版の「私の視点」に載っていたのである。富永先生の温和な顔写真と三段に渡る本文が堂々と紙面の一角を占めていた。私たちが参加していた全国大会の会場で、力を込めて訴えていた富永先生の思いがこのような形で素早く結実するという経験は何か人ごとではない感覚に包まれた。

日本学校教育相談学会は先生の思いを正面から受け止め、提言の実現に向けて今後どのように動き出すのかを模索、検討し、一人ひとりの会員ができる協力は惜しまない姿勢を今示すときではないだろうか。（柴 一弥記）



## ○ ガイダンスカウンセラーに関するシンポジウム報告

去る8月16日（金）に東京聖栄大学において、スクールカウンセリング推進協議会主催による公開シンポジウム2013「ガイダンスカウンセラーの未来地図Ⅱ」が開催されました。まず、國分康孝先生の開会の辞に始まり、文科省の池田宏氏が来賓の辞を述べられ、河野世章先生からはガイダンスカウンセラー資格認定試験の説明がなされました。次に、現場でガイダンスカウンセラーとして活躍されている藤川章、真鍋孝徳、山田智之、入駒一美、土井純先生ら5名の方々から話題提供がなされ、吉田隆江先生を司会に、加勇田修士先生から企画趣旨が述べられました。その後、100名を超えるフロアの先生方と、國分先生を交えたシンポジストの先生方との間に活発な意見の交換や新企画の提案がなされ、最後の村主典英氏による閉会の辞によるお開きまで、大変有意義で熱のこもった時間が共有されました。（平峰 孝二記）

○ 事務局からお知らせ 平成25年度事業計画

開催期日	事業名	会場	備考
10月19日(土) (12日から変更になりました) 13:30~16:00	【第24回支部研究発表】 *コメンテーター 毎澤 典子先生 発表者① 日光市立落合西小学校 石塚 晴美 発表者② 栃木県連合教育会相談員 村上 恵子	栃木県教育会館 2F小会議室 とちぎ青少年センター 研修室に変更	
11月9日(土) 13:30~16:00	【第25回支部研究発表】 *コメンテーター 原田 浩司先生 発表者① 日光市立日光東中学校 吉川 修司 発表者② 県立栃木工業高校 岡本 幸二 発表者③ 栃木県連合教育会相談員 山崎 匡	栃木県教育会館 2F小会議室	
12月7日(土) 13:30~16:00	【カウンセリング特別講座・合同研修会】 講演「子どもは未来からの留学生」 講師 中山 昌樹先生	栃木県教育会館 5F小ホール	白鷗大学講師
1月11日(土) ~12日(日)	【日本学校教育相談学会・第24回「中央研修会」】 学会シンポジウム テーマ「いじめ問題の予防と解決を考える」(仮題) 司会 中里和裕氏(宮崎県総合教育センター)	国立リリック 青少年総合センター	
1月25日(土) 10:00~16:00	【発達障がいセミナー】 感情のコントロールなど 講師 山岡 祥子先生 詳しくは後日お知らせします	栃木県教育会館 1F 中会議室	臨床心理士
2月1日(土) 13:30~16:00	【精神医学特別講座・合同研修会】 講演「女性のためのやさしい精神医学」 講師 加藤 和子先生	栃木県教育会館 5F小ホール	さくら・ら 心療内科

日本学校教育相談学会栃木支部

〒320-0066 宇都宮市駒生 1-1-6 教育会館内  
栃木県連合教育会相談部

日本学校教育相談学会栃木県支部事務局

(事務局 谷津 嘉子・中山 芳美)

TEL 028-621-7274 FAX 028-627-5682

E-Mail : [soudan@tochigi-rk.jp](mailto:soudan@tochigi-rk.jp)

(発行責任者 丸山 隆 / 広報担当者 藤浪 直紀)